



SX-4/64M2、FUJITSU VPP800/63など多様な並列計算機を利用した。これらの並列計算機上で、プログラムの取る選択方式が異なるといふ結果からも、アルゴリズムの自動選択が大変重要な機構であると同時に実際に適用可能であることが示された。このように自動チューニング機能を適用することは、ライブラリを使う利用者の利便性を上げ、また、並列計算機の資源を有効に活用することにつながるものと考えられる。今後、自動チューニングを備えたライブラリが増えていくことは間違いなく、本研究はそのための指針を与えることができた。

本研究は、片桐孝洋・大澤清・金田康正との共同研究であるが、論文提出者が主体となって分析及び検証を行ったもので、論文提出者の寄与が十分であると判断する。したがって、博士（理学）の学位を授与できると認める。